

氏名（本籍）	フジ 藤 井 尚 子（神奈川県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第145号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位論文等題目	作品 赤の始源 - 垂直に向かって 論文 赤の力学 - 色をめぐる人間と自然と社会の構造
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 上野 浩 道
（論文第1副査）	" 助教授（"） 佐藤 道 信
（作品第1副査）	" 教授（"） 松 永 勲
（副査）	" "（"） 本 郷 寛
（"）	" 助教授（"） 木 津 文 哉

（論文内容の要旨）

問題意識

染色は、二つの異なる主体を持つ。

ひとつは、水やアルコールに親和する色素を液状にした染液が、流動し、被染物である糸や布などに毛細管現象によって浸透する「色」である。一方は、流動的な色を、さまざまな防染技法により制御する「人間」である。染色を「シミイロ」ではなく「ソメイロ」と訓ずるのは、人間が色を染（そ）めるといふ技術の間接的な表現である。それゆえ、染色は、今日、一般的に色に関わる技芸として美術工芸という範疇に布置されており、自らの染色作家としての制作における当初の問題意識も、染色独自の防染技法によって、いかに任意の形象と色彩に独創性をもたせるかということに終始していた。しかし、そもそも染めることは、まず自然界の事物
色材 に対して働きかけることで抽出されるあらたな事物 色 を、さらに別の事物 糸・布 に置換するといった「事物の変生」を経て、客体化する。そこには、染（し）みるから染（そ）めるといった色と人間の転移が見られ、この二つの異なる主体の関係性こそ、染色における色の意義であり特徴なのである。つまり、色をめぐる「事物の変生」は、単に染色技術の物理的特性に言及しているだけではなく、そこに人間が自然を模倣し、加工することで形成した「文化」に至るまでの軌轍を重ねることができないのではないかと。文化とは、自然 - 人間、人間 - 人間 の連関とを二重性において象徴化した諸形態とされることを援用すると、文化における色とは、自然 の色材から 人間 が色を抽出することで技術と神話的象徴性を醸成し、その色を染めることによって 人間 - 人間 の連関を基盤とした精神的文化を育み、色を意識的に選択し用いる技術および社会的象徴性を醸成するといえる。

本研究では、染色における 色材 - 色 - 染色および染色物 の連関を、自然 - 人間 - 社会 とされる文化の連関と重ね、人間と色の関係性から、社会および文化を創造す

る思想の構造を明らかにすることをめざした。

本研究の目的および研究方法

まず、本研究では、色から日本の社会文化史的思想を追究するとした目的から、特に、わが国の社会および文化的に浸透する色である「赤」に注目した。「赤」における色材の研究は、史学、地理学、考古学、文学、経済学、色彩学、服飾史、染色史など多岐の分野にわたり、松田壽男、市毛勲、今田信一、吉岡常雄・幸雄、後藤捷一・山川隆平などに詳しい。しかし考古学では、赤色料を総じて「赤色」「赤色物」とし、市毛においては「語感がよい」として赤色顔料全般を「朱」と呼んでいる。民俗学における赤は白および青との対応で考えられ、例えば民間信仰に見られる「紅」は、色材を限定せず赤系の色を総称している例などから、しばしば赤系色材を詳細に個別研究されているにも関わらず、それぞれの固有色の関係性を「範疇」として構造化したものは見られず、さらにそれを補強するものとして色材の物的象徴性の連関にまで踏み込んだものは多くない。特に「日本人の心の色」とされる紅（アカ）色材「紅花」（以下、ベニバナと記す）の研究について、前出の今田や真壁仁が詳しく述べている。生薬としてのベニバナ研究は、漢方薬を中心とした東洋医学の関連で多く言及されている他、筆者研究ノートで行なっている。染色法では、前出の吉岡や前田雨城が『延喜式』に則した技術復元を試みている。その他、化粧史や服飾史でとりあげられている。しかし、紅の呼称 クレナイとベニについて、文献によって曖昧な点が見受けられ、色材物性と色の乖離した状態が一因にあると思われた。

このことから、本論文では、まず色材の物的象徴性から色名の来歴を求め、さまざまな色名をもつ種々の赤の象徴性の連関から、わが国の社会文化史的思想の構造を明らかにし、同時に「赤」の重要性を引き出すことをねらいとした。さらに、従来の赤をめぐる個別的な研究に対して、自らの染色作家としての制作プロセスを基礎に、多領域にわたる先行研究の横断的關係性について考察を行なった。特に、天然染料をとりあげ、色をめぐる歴史的背景や日本文化論のフィールドを踏まえ、色をめぐる人間と自然と社会の構造化をめざす研究方法を採用した。さらに、今日、一般的に重用される化学合成染料（以下、化学染料と記す）とは、初期の文明において発展してきた染色における、科学的リサーチの集大成であると考えられる。天然染料を色材にした色を原点に、過去から現在まで連綿とつづく人間と色の連関を考察することは、化学染料に対しても新たな意義をあたえることとなる。

本研究の構成

本研究の構成は三章からなる。いずれも色材の物的象徴性を起点とすることで、「アニミズム」をわが国の社会および文化的思想の基盤とした。人間が文化を形成する前段階にある、自然に準拠した認知こそ、わが国の社会および文化の基底を成すと考えるためである。一方で、自然を把握した人間は、社会 人間どうしの「ヘゲモニー」争いによる垂直的な連関 を築くこととなる。わが国の社会文化史的思想の構造を貫く二つの座標軸に、「アニミズム」と「ヘゲモニー」を布置したことが、本研究の特徴である。

第一章では、まず、色材を顔料と染料に大別することで、自然界の構造を示し、顔料は染料

の前身であると捉えた。さらに、赤色顔料である「丹(に)」を土の物性と重ねることで、アニミズムを基盤とした両義的象徴性を有する「最古層の赤」とした。その上で、「丹(に)」が選別分離されて発現する新たな赤 - 「朱」と「ベンガラ」 - を歴史的文献から考察し、社会的階層におけるヘゲモニー争いにおけるイデオロギー装置化した赤について示した。「朱」と「ベンガラ」は、それぞれイデオロギー装置として優性・劣性の象徴性を付与されたが、しかし、劣性である「ベンガラ」は排斥されず、むしろ相互補完的な対立概念として、均衡を保持した点が注目された。このような自然を出自とした色材への明らかな認識のもとでの人間と色との連関は、物質的文化のみならず、神話的象徴性の形成を促進し、基盤にあるアニミズム的思考は、わが国の社会および文化的思想の根源にある両義性を補強することとなったことを明らかにした。

第二章では、次世代赤系色材として登場する「ベニバナ」が、「クレナイ」と「ベニ」という異なる色名を持つに至った経緯を、それぞれ「美」と「生命力」といった「人間的自然」の本能的欲求において考察した。「クレナイ」について、当時の渡来系社会構造および文化を踏襲したわが国の中央集権国家を背景に発達した「禁色」から、不可視の権力や富を、可視的な色の「美」と結びつけるイデオロギー装置であったことを示し、「クレナイ」を「朱の系譜」として構造化した。一方で、色材「ベニバナ」は生薬としての機能をもっていることから、「赤」が「生命力」と直結した背景を明らかにした。生薬と染料の関係を表にまとめることで、色が人間の内的および外的身体に与える影響力について考察をおこなった。特に、ベニバナから得られる紅(アカ)色を「レーキ化」した「ベニ」の特性と「丹(に)」の類似性に触れ、「丹の系譜」として構造化した。これらにより、色彩的差異を有する「赤」は、人間の営みにおける集団的想念のダイナミズムを形成する社会的ヘゲモニーと、一方で、生命力への渴望からくるアニミズム的願望とのそれぞれの目的に適合することで、より微細に社会的意義を有する「赤の範疇」を形成することが明らかとなった。

第三章では、近世の社会構造における 生産 - 交換 - 消費 のヘゲモニー争いを「赤の力学」と捉え、その構造化を目ざした。研究方法は、近世、主要なベニバナ生産地であり集積地であった山形県西村山郡河北町谷地に現存する「雛人形」を事例とし、雛まつりでの聞き取り調査の資料を中心に、生産地における「赤」の意義について考察を行なった。当初、色材の生産地は、色を手にすることができなかつたため、雛人形における「赤」に、消費地への憧憬を見ていたと考えていたが、実際には雛人形における「赤」には、当地の風土的条件および生業に醸成された、消費地とは異なる意義があることが明らかになった。さらには近世以降、新たな社会構造の目的となった「消費」における色材の不在感は、自然 人間の連関を断絶させ、さらには、「交換」における間接性の増加は、無秩序な多元的象徴性を醸成し、それまで「赤の範疇」を構築し均衡を保持していた対立概念のモジュールを破線のなものとしたのである。そして、対立概念のモジュールが希薄化し分断したことで、多元的象徴性の乱立により断層化した「赤の範疇」は、今日的な「赤」の概念に集約されていく端緒となっていったことを明らかにした。

研究成果

本研究で得られた成果は、従来の色に関する個別的な研究に対し、「赤」をめぐる種々相を大きな「赤の範疇」として構造化した点にある。本研究における「丹(に)」や「ベニバナ」などいずれの色材も、まず物性を有し、自然界の構造における確固たる位置関係による物的象徴性は、それぞれの色の本質を表しているといえる。さらに、そこから抽出される「朱」や「ベンガラ」、「クレナイ」、「ベニ」といった色は、その色を感じ取る人間によって、「高明度 - 低明度」、「高彩度 - 低彩度」といった色彩的差異において分化され、それぞれの色に、「(権力)支配 - 服従」といった不可視の事象の象徴性を対立的に付与することで、対比的に認識するといった構造が見られるのである。それは、人間が不可視の事象に対して、「色」など可視的な事象を借用し、それらに対立的な象徴性を付与し、分類し、認識していたことを示すものである。そして、これらの構造は、自然と人間の連関におけるアニミズム的潮流と、人間と人間との連関にみられる政治的象徴性を付与されたヘゲモニー的潮流の二つの流れを、わが国の文化の支柱としており、その両義的構造は、対立概念にありながらも、相互に補完的な力関係を保持しており、まさに人間の営為における社会および文化の形成と不可分であることが明らかになったのである。

色を染める技術として染色を捉えた場合、特に、美術の概念にある両面性 - アニミズムとヘゲモニー - における人間と人間の連関の力関係に傾斜し、色はいよいよ自律的存在として近代性を獲得することとなる。しかし同時に、色材の物的象徴性を失った色は、象徴性の根を失ったといっても過言ではない。物的象徴性から事物を認識し、自然を加工することで文化を創出した人間の営みとしての色は、現象として人間の知覚に訴えるだけでなく、人間の認識や想像力にはたらきかける存在として重要なものである。色をとおして、文化の根幹を成す美術の本質的意義を問う上で、染(し)みるといった主体的な色と、人間のはたらきかけによる染(そ)める色といった双眸を獲得することが重要であるとし、これを結論とした。さらに、本研究は、近代性(モダニティ)とともに、記号的で単一的な色概念となった「赤」についての検討となるだけでなく、本来的な「赤」 - 多元的象徴性を有する「赤の範疇」 - をモジュールとすることで、脱近代性(ポスト・モダニティ)における多文化主義的視座を獲得する一つの契機および緒口となるものである。